

《正岡子規(36)の続き》その266  
子規周辺の人びと(十六)

平岸 三八

子規は「半生の喜悲」に、喜としては在京の叔父からの上京の許可、常盤会の給費生となった時、東京大学予備門への入学を挙げ、悲としては故郷よりの離愁、大学予備門での落第を挙げている。

初めての上京のため、松山の外港、三津からいよいよ乗船し出帆する際には、さすがの子規も、初旅といい、つれはなしで実に心細かったらしい。

しかし故郷松山を離れるの悲哀は、出帆の際のみのことではない。三津出帆までに、いくたびか悲哀の感を起している。先ず出帆の前日、中学の明教館ではつきりは言明しなかったものの、暗に別離の演説をし終って降壇し「落涙数行、暗二衣襟ヲ湿セリ矣」の状態であったことは既述した。

出発の日の午前中は、離盃を交し、献酬したというが、少年でしかも下戸であった子規にとっては、形ばかりのものだったであろう。

正午には親戚、朋友が見送るなかいよいよ人力車に乗って出発である。朋友は「電勉」(勉強せよの意)、親戚は「息災」(健康であれ)と口々に云うが「欲答辞不出」であった。「車走去人己遠 願望呼

悲哉」。送別の言葉にも、答えようとしても言葉が出ず、人力車は走り出して人は遠くなり、振り向いて悲しいかなと叫ぶばかり。

自家での離筵には親戚、友人が集ってきた。母や妹律は、三津までは送らなかつたようである。前夜、道後温泉に行つた二友人は、更に三津まで見送りに来たが、この親しい友人の氏名は明らかにされていない。

乗船して中等室に入り、東都に遊び宿志を達するのは「快言フベカラズ」であつたが、「一人ノ我ニ同伴フ者ナキ」には孤独の悲しみが、ひしひしと身に沁みただろう。誰か友人と同行したいと切に思つたにちがいない。

自家の送別の会に、友人は「電勉」といい、親戚は「息災」といった。学問のための上京であるから勉学にいそしむのは当然であつた。幸いというか大学予備門の入試には、まぎれで合格した(明治17年)。しかし英語の学力不足により、数学で落第点をとり(数学も英語で説明のため)、入学早々留年した。これが第二の悲である。

明治19年、大学予備門は第一高等中学と改称、23年東大文科哲学科に進み、24年には哲学科から国文学科に転科したが、7月の学年試験は頭脳が悪くなり堪えられようになり、学年試験(大正9年まで、官立高等学校、官立大学の学年の始期は9月1日)を放棄して帰国した。

9月には出京して、残る試験を受けなければならぬので、今回は国許から特別

養生費を支出してもらつて、大宮の万松楼という宿屋に泊り準備をすることとした。

ところが閑静で涼しく、うまいものは食べる、景色はよしで、萩の盛り、松林のなかを散歩して疲れて帰ると、俳句ができる。この愉快をひとりでもむさぼるのは惜しいと、漱石などを呼びよせて同宿、準備どころではなかつたが、頭のためには非常によかつた。

結局、このときの試験はごまかして、どうやら通つてしまつた。

その後も試験だからと、机辺をかたずけてノートを広げると、俳句が浮んでくる。書こうとしても句帖も半紙も出していないから、ランプの笠に書きつけて、笠を書きふさげてしまふ。

このように試験という俳句が出てきて、こう「俳魔」(子規の「墨汁一滴」中の語)に魅入られてはもう助かりようはない。明治25年の学年試験には落第した。リースという先生の歴史で落第したのだからと推測された。落第もする筈で、歴史の講義を聴きぬゆかぬし、聴きに行つても、ドイツ人の英語は少しも分からぬし、それに歴史を少しも知らぬのだ。それに試験にはノート以外の事が出たというのだから落第して当然であつた。それぎり学校をやめてしまつた。これが子規の試験のしじまいで、落第のしじまいであつた。大学卒業を断念。即ち電勉(学問)は未完成に終る。